



辻邦生

夏の海の色

昭和五十二年一月二十日初版発行
昭和五十二年三月五日三版発行

著者 辻 邦 生

発行者 高 梨 茂

印刷所 三 陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一

振替東京二二三四

©一九七七 検印廃止

夏の海の色
目次

暮れ方の光景

7

風雪

33

泉

57

河口風景

87

夜の歩み

115

夏の海の色

141

凍った日々

175

水の上の顔

207

古い日時計

235

祭の果て

255

海峡

285

彩られた雲

315

装幀 中島かほる

夏の海の色

——「ある生涯の七つの場所」

2

暮れ方の光景

その町を思いだすとき、なぜ暮れ方のひと時の空の気配、細い通りをゆく勤め人の歩み、赤い、傾斜の急な屋根屋根をこえて響く鐘の音がつねにそれに付き纏うのか、私にはよくわからない。おそらく私はその町をよく散歩したのがその時刻だったし、エマニエルが図書館から戻ってくるのも大抵は大学の鐘が鳴ってからで、私は旧城門の外まで彼女を迎えに出かけたためであったのかもしれない。

その町に住んだのは、それでもエマニエルが大学の前学期プレ semestreを終えるあいだだったから、半年以上にはなっているはずである。しかし記憶に残る暮れ方の空は何となく秋、それも晩秋の気配

で、雲の色も淡い茜色から薑色に変わってゆくのが、いまでも眼に残っている。

町には大学以外に大寺院と市役所があるだけで、近在の小工場に勤めるか、丘の向うにつづく農地を耕すかするほかは、人々が何で生活していたのか、不明である。多少の観光客（この町は中世以来の伝統を持ち、城門と城壁の一部、それに大寺院は観光案内書にも星二つの等級が付けられる程度には有名であった）がくると、学生の下宿屋をやるのとで、幾分町は潤ったであろうが、下宿などでも一人分の食い扶持がはじき出せるか出せないかぐらいではなかったかと思う。町の人々の暮らしはつましく、年配の婦人たちは年じゅう黒っぽい服に、古びた黒靴だけで過し、靴下なども老婆が窓際でつくろっている姿をよく見かけた。

城壁に囲まれた町は、路地も狭く、丘の自然のカーヴにそって曲っていたりしたが、どんな小路の奥までも、細かい、つぶつぶの、黒ずんだ石だたみが敷き詰められていた。町は丘の上に立っており、向いの丘との間には川が流れていて、その蛇行する川は町のある丘を半周していた。向いの丘に立って、谷を越えて、町のある丘を眺めると、中世さながらの城壁が、なお、かなり長い距離、よい状態で残っていて、それに囲まれた家々の赤屋根と大寺院と大学とが、夕方など、物語の挿絵か、芝居の書割のように、西空を黒いシルエットで区切っているのがあった。

この町が栄えたのは、谷と川に囲まれた堅固な地形のためであることがすぐと知れる。丘の向うはなだらかな斜面になって、森や林を点在させながら、遠く起伏する広大な耕地に連なっていた。

学生たちの多くは講義が終ると、図書館にこもるか、集会所で喋ったり新聞雑誌を読んだりするか、あるいは市役所前広場にある何軒かのレストラン兼バーにいつてビールを飲むぐらいで、あとは大半下宿の自分の部屋にこもって勉強していた。大学には校庭も何もなく、アメリカや日本で見られるような運動に興じる学生の姿は見られなかった。そのかわり城壁にそった谷間は美しい遊歩道になっていて、対岸の丘の林が黄葉するのを眺めながら歩いたり、ベンチで本を読んだり、お喋りしたりする学生は少なかった。

映画館が一つあるだけで、ピリヤードもボウリング場もなかった。およそ娯楽と名のつくものはこの町には入りこんでこないように見えた。町の入口の城門の正面に昔の町の紋章が石に刻まれている。そこには球に手をかけた二頭の獅子が表わされていて、それが城門の下を出入りする人を胡散臭そうに見下していた。

「こいつのせいだな、この町に面白い気晴しが入りこんでこないのは」

私は城門の下を通るたびにその二頭の獅子を見上げて言った。獅子はくしゃみをしたがっているみたいに顔をしかめていた。

「でも、このおかげで悪魔も入ってこないのよ」エマニュエルは眩しそうに眼を細めて言った。

「この町は宗教戦争のときも無事だったし……この地方の町々が荒らされたことを考えると、やはりこの町が助かったのは奇跡みたいだわ」

「それはこの町が要害の地に立っているからだと思うね。食糧さえあれば何日でも持ちこたえら

れるからね、これだけの城壁があれば」

「でも、私は獅子のせいだと思いたいわ。この町には比較的長寿の人が多くて。それも悪魔が入ってこないせいよ」

「とんでもない知識を持っているんだね」

「伊達に勉強していないのよ」

「どうもそうらしいね。これは、いまに、大へんなことになるね」

「きつと、頭が重くなって右か左に傾くわ」

「そうしたら、きつとぼくが要るようになるね、誰かが支えなければならぬから」

「いまでも要るのよ」

「しかしぼくたちはまだ結婚していないんだぜ」

「そんな必要はないわ」

「そうかな」

「そうよ」

「頭が重くなって傾いでもかい？」

「そうになったら、どこかへ行ってしまう？」

「そう見える？」

「見えないけれど……」

「じゃ、行くわけないよ」

「でも、行く自由は持っていていただきたいわ」

「それは君にとっても同じだよ」

「そうね……」エマニユエルはしばらく黙ってから言った。「あたしね、あなたが夜、急にいなくなっても、決して泣くまいと思うのよ」

「よほど信用がないんだね」

「お互いにそんなふうに縛られてはいけないと思うのよ」

「ぼくは多分泣くね」

「そう？」

「ああ、泣くのが相手への礼儀だと思うからね」

「礼儀で泣くの？」

「いや、そうじゃないけれど、その位の生活は一緒にしていたと思いたいね」

エマニユエルはかすかに笑った。

「何かおかしいかい？」

「いいえ」彼女は私の腕に自分の腕を差しこみ、私の耳に口をつけるようにして言った。「あなたって、いい方ね。本当にいい方よ」

こんどは私が笑う番だった。しかしエマニユエルの気持がそれで変るなどということは考えら

れなかった。ただ私には、万一ある夜私が突然彼女のもとを去ったとしたら、彼女は私を引きとめることはしないだろうが、ひとりになって声を立てずに泣くだろうとは思えたのである。

私たちは、片方が城壁にくっついて古い、門の前に水車を飾ったレストランで食事をするとき、よくこんなたわいのない話を交した。レストランのなかには黒ずんだ檜の重厚なテーブルや食器戸棚が並び、清潔な、赤と白とのチェックのナプキンが厚手の、四季の農耕図を描いた食器とともに、明るい楽しいような気分を与えていた。

痩せた長身の主人がボーイ長格で、自分から、金ボタンの二列についた白い制服を着てメニューを配り、注文をとり、葡萄酒を選んでいた。客の半分は学生たちだったが、あとの半分は町の裕福な感じの中年の人々で、善良そうな鳶色の眼をした、綺麗な顔の女主人がそんな人々の相手に出てくることがあった。

エマニュエルの選んだ講義の一つが、夕食後の、夜八時から始まるので、私は落葉のがさがさ鳴る暗い大学構内までレストランからよく彼女を送っていた。

「これじゃまるで夜学だね」

私はそう言ったが、もちろんそれは昼の講義を教授の都合で夜やっているのだった。私は鳶の葉に覆われた黒々とした大学の建物のなかで、二階のその教室だけが明るく燈りがついているのを見て、何か胸が痛くしめつけられるような気持を味わった。もちろんそこで行われているのは私が学んできたのとさして違わぬ学問であるはずであった。しかしこの小さな森閑とした町で、

晩秋の風が落葉をかきごそと吹くような夜、熱心に、集中して、実利からも名声からも離れて、真理愛のためにだけ人々が集まっているということ——それは、当時の私には、何か信じがたいことであるように思えたのである。私もそこへゆく資格があり、しかるべき手続きさえとれば、その中へ加わることができたのであるから、私を捉えたのは、自分がそこへ入れないという悲哀でも不満でもなかった。私を寂寥感で捉えたのは、この城壁に囲まれた、人口五千にも満たぬ町の落着きであり、時代離れた沈鬱な瞑想的気分だった。第三の城門——兎の紋章がついているところから兎頭の門と呼ばれていた——の近く、川を見おろす塔のある家に、ここの大学で学んだ高名な詩人が二年をその家で過したという真鍮板の標識が出ていた。その家の前の、大きな鈴懸の木に覆われただらだら下ってゆく道は、その詩人のことを思うせいか、踏まれて丸味を帯びた石たたみにも、両側の斜面の急な屋根を持つ家々の壁にも、不思議と懐かしい静寂の気配が漂っていた。散歩の途中、そのあたりへくると、その光景にはどこかの水彩画の上で出会っていたような気持になった。

どんなにゆっくり散歩しても、町の端から端まで二十分で歩くことができた。城壁にそって、町の外周をまわったとしても二時間もあれば元の場所に戻ってこられるのだった。だが、この静寂と、町の狭さとおかげで、昼の講義を夜にまわすようなこともできるのだった。それに対して学生たちも別に文句をいうわけではなし、町の誰にも不都合があるのでなかった。

私が、暗い大学構内で感じた寂寥感は、そうした一種の自由さに対する羨望と裏腹になっていたい